

ロウバイ・・・



春まだ遠い1～2月の厳寒期、ロウバイは梅に先駆けていち早く咲きます。その名のとおり、蠟細工のような黄色い厚手の花びらをもった花は冬の青空とのコントラストも鮮やかで、花の少ない時期だけに、その香りのよさとあいまって見る人の心に暖かさを運んでくれます。

当団地では、6・7号棟の間に、目立ちすぎず華やかすぎず、気品を見せて咲き誇っています。ロウバイは普通、花の中心部が暗紫色で、その周囲が黄色ですが、ここのは花全体が黄色いので、近縁のソシンロウバイ（素心蠟梅）です。

名前に梅の名が入っているので、バラ科サクラ属と誤解されやすいのですが、ロウバイ科ロウバイ属の落葉低木です。葉は、ふつう花が咲く前に落葉するのですが、開花時もまだ残っていて、これから徐々に落葉するようです。

17世紀頃に中国から渡来してきたため、中国名の「蠟梅」がそのまま和名になったと言います。でも、花を見れば原産地の中国でも日本でも「蠟」の字が当てられたのは至極当然という気がします。また、臘月（ろうげつ：陰暦の12月）に梅に似た花を咲かせるからという説もあります。

繁殖は挿し木が一般的ですが、実生からの育成も容易で、晩秋、アズキに似た焦げ茶色の実がなるので採って播くといいでしょう。

学名は「*Chimonanthus praecox*」で、“*Chimonanthus*”は、ギリシャ語の「cheimon（冬）+ anthos（花）」が語源で、「冬の花」を意味するものです。“*Praecox*”は「早熟の」または「早咲きの」という意味です。

このロウバイ、花卉には本物の蠟細工のような油を含んでいます。寒さや霜から身を守るための工夫なのでしょう。そして、これが芳香のみなもとということになります。

英語では「Winter Sweet」と呼ばれるそうで、これもすんなり納得できますし、花言葉の「先導、先見」というのも、他の花に先駆けて真冬にいち早く咲くこの花をよく表していますね。

私はまだ行ったことがありませんが、長瀬宝登山のロウバイ林は見事だそうです。一度訪れてみたいものです。